

## 201号

### 平和について

小林三衛

今年8月、夏期聖書研究集会で、「十戒を現代に学ぶ」をテーマとし、第四戒まですすめられた。第六戒は、次年度になるであろうが、「あなたは殺してはならない」(出エジプト 20:13、申命5:17)とされている。とくに重要な戒である。イエスは、大祭司の僕に切りかかった者に、「あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる」(マタイ 26:51-52)といわれた。殺してはならないことと、剣を取らないことは、共通しており、平和の出発点となっている、といえるであろう。

「平和について」、現在、わたくしの理解できる範囲において、戦争のないこと、挨拶のことば、主にある兄弟同志が平穏・無事であること、平和を追求すること、イエス・キリストの十字架の死によって、平和が与えられことの5つに分類してみたい。

平和は、旧約聖書では、シャーローム、新約聖書では、エイレーネーを使っている。

①戦争のないことについて、「ヒラムとソロモンの間には平和が保たれ、二人は条約を結んだ」(列王上5:26)、「わたしは彼等と平和の契約を結ぶ」(エゼキエル 34:25)、フェリクス「閣下のお陰で、私どもは充分に平和を享受しております」(使徒24:2)などにみられる。②挨拶のことばとして、「大いなる平和をお祈り申し上げます」(エズラ5:7)とあり、パウロの手紙には、すべてについて(ローマ 1:7、コリントI 1:3、コリントII 1:1、ガラテヤ 1:3、ピリピ1:2、テサロニケ I 1:1)。イエスから派遣された者が人を訪問するとき、「平安を祈ってあげなさい」(マタイ 10:12)というのも、挨拶といえるであろう。③主にある兄弟同志が平穏・無事であることについて、「あなたのうちに平和があるように」(詩122:8)、「自分自身の内に塩を持ちなさい。そして互に平和に過ごしなさい」(マルコ 9:50)、「愛し敬いなさい。互に平和に過ごしなさい」(テサロニケ I 5:13)などと伝えられている。④平和を追求することについて、「悪を避け、善を行い、平和を尋ね求め、追い求めよ」(詩34:15)、「平和に役立つことを追い求めようではないか」(ローマ14:19)、「きよい心をもって主を呼び求める人々と共に、義と信仰と愛と平和とを追い求めなさい」(モテ II 2:22)と説かれている。義も信仰も愛も平和も求めなければ、与えられない。⑤イエス・キリストの十字架の死によって、平和が与えられることについて、「信仰によって義とされたのであるから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている」(ローマ5:1)、「神は、御旨によって、御子のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ、そして、その十字架の血によって平和をつくり、万物、すなわち、地にあるもの、天にあるものを、ことごとく、彼によってご自分と和解させて下さったのである」(コロサイ1:19-20)とされている。この点が決定的に重要である。キリスト教における究極の平和である。「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」(ルカ2:14)は、神の讚美であるとともに、神がイエス・キリストを十字架につかせることによって、人間の罪を許し給うことを意味している。「平和の神」(テサロニケI 5:23、他)は、それをあらわしている。

## 204号

### 敬愛する田中獅熊さんを送る

小貫 武壽

水戸無教会聖書集會に50年近く出席して信仰を共にしてきた田中獅熊さんが、90年の地上での歩みを終え、今年4月天に召された。さまざまな苦難の人生の中で、キリストの信仰に導かれ、矢内原忠雄先生の聖書講習会や石原兵永先生の夏期講習会に参加して聖書を学ばれた。当初より信仰を共に歩んできた亡き友のお顔が浮び、またそのお声が聞こえてくる。

田中さんは、日本の原子力研究の草創期に東海村に來られ、東海研究所「真砂寮」管理人として勤務、多くの職員のお世話役を誠実に務めてこられた。

田中さんは「この私の葬儀を、神様に感謝し、神様のみ名をあがめる機会としたい」との願いをご遺族の方々に伝えられた。そして葬儀・告別式は、下記の式次第のように2008年4月26日（土・午後0時）セレモニア富士水戸駅南館で執り行われた。

ここに、式辞と親しく交わりをいただいた人達の思いをのせた。田中さんを天に召し給うた神に心からの感謝を捧げたい。

## 207号

### 故星野徹兄の葬儀・告別式の式辞（二）

大森 孝夫

〔はじめに〕

① 私どもがひとしく敬愛してやまなかった星野徹兄は満83年の旅路を歩みつくされ、本年1月13日午前、静かに主の御許に召されました。本稿（一）、（二）は1月17日、水戸市で執り行われました同兄の葬儀・告別式における式辞の原稿に加筆し、補訂したものです。

② この式辞（二）は式辞全体を編集等の都合により、司式者（大森）が2分したものの後半部です。主として星野兄の信仰、信条等を中心に述べたもので、前半部の「私は以上、皆さまと学んで参りましたキリスト教葬儀の意義・目的が本日の星野徹兄の葬儀により強く、より明確に生かされますよう再度祈念し、次に兄の信仰と生涯の大略について学びたいと思います。」に続くものであります。

③ キリスト教葬儀の意義・目的についても、ぜひご理解を賜りたいので本誌前号（206号頁1,2）をご参照頂けますならば幸いに存じます。



平成14（2002）年9月—水戸市北西部の豊かな自然の台地に在る市営墓地「浜見台霊園」に一基の墓碑が建立されました。側面にある刻みからこの碑は星野徹兄と俣子夫人が建立されたものであることがわかりました。そして正面の墓碑銘は星野兄によって選ばれ、書かれたもので短い聖書のことばでした。その筆蹟はある著明な書家が、かつて星野兄の書を評したように「自分の言葉を精魂込めて、一点一画に分身を置いていくような、純情無礙の少しの虚飾もない…」ものであり「主はわが牧者」と刻まれていました。

「主はわが牧者」—「主はわたしの牧者」—「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。」（口語訳）これらのことばは旧約聖書中に150篇ある『詩篇』の第23番目の詩の冒頭にあることばです。この詩は静かな信頼と強い信仰のうちに神をたたえる詩として多くの人びとに知られてきました。また短い詩ではあるが非常に美しく、多くの人びとに親しまれ、人びとを慰め励ましてきたもので、「詩篇の真珠」とも呼ばれてきました。また私たちの聖書集会発足の端緒を作ってくくださった矢内原忠雄先生はこの詩篇23：1～2について次のように述べております。（摘記）

「神は我等に負い難き重荷を負わせ給わず、往き難き距離を歩かせ給わない。一日の生活に於いて昼間労働の時にも倒れざるよう聖言のなぐさめあり、夕方疲労の身を横たえる時にも聖霊のいたわりがある。我等の一生に於いても然り。人生の真昼時壮年の時の戦にも、はた又最後の眼を閉ずる黄昏時の静思にも、神は我等を希望の緑野、永遠の生命の水に導きて平安あらしめ給うのである。」

私はこの矢内原先生のことば、講解に感動し、深く神に感謝された人びとの中に星野徹兄も居られたことと思います。なぜなら○a星野兄は5歳のとき父君（34歳）と死別されました。また11歳のときは母方の兄弟が居られた台湾に移住されました。そして20歳のときは太平洋戦争敗戦のため集団引揚げとなり、一家全員、すべてを捨てて、第二の故郷、台湾を去らなければなりませんでした。そして2000年の晩秋、75歳ではウイルス性の重患に罹患してしまいました。このように星野兄は多くの苦難、艱難に遭いましたが希望と感謝、そして向上、努力の念は捨てませんでした。○b「わたしはかねがね、旧約・詩篇を幾度となく繰り返し読んでいました。」とは星野兄のことばですが、兄は徹底して聖書を学び続けました。またタイポロジーの研究にも努められました。

○a—苦難に耐え、○b—ますます聖書の学び、信仰の学びに努める星野兄の姿は、ますます神の嘉し給うところとなり、兄の「主はわが牧者」の信仰は徐々にしかして着実に深化されていきました。今、星野兄は天より、深化、純化された「主はわが牧者」の信仰を次のように教えられていると私は確信しています。

「私たちは羊のように無力で迷い易いものですが、神様は決して私たちを見捨て給わず、いつも私たちと共にいて下さいます。そして私たちの羊飼いとなって希望に満ちた緑の野や永遠の生命の水の豊かないのみぎわに伴って下さいます。また神とともに在る主の家に長くとどまらせて下さいます。」

終りにご遺族の皆さまに矢内原忠雄先生のことばと、伊藤祐之先生の歌をご紹介します

たいと存じます。（伊藤先生は星野兄が教授として勤務された茨城キリスト教大学の創設時の教授で旧約学を担当されました。また水戸のお宅で集会をもたれていた無教会伝道者でもありました。先生については「無教会史II」頁114以降をご参照下さい。）

矢内原先生は「愛する夫を妻を、子を親を、天に召されし兄弟、姉妹よ」と呼びかけられ、「愛する者を天に召されし人々におくる」と題する深い慰めと愛溢れる文章を書かれました。（『嘉信』78号1944年6月、嘉信社）次にその結びの部分を出してみましょう。—「愛する兄弟姉妹よ、あなた方の大切な宝が天に召されました。併し決して死滅したのではありません。地上に居た時よりも更に盛な生命で、キリストの中に生きつづけて居るのです。彼らが地上に居た時に勝る力添えと慰めとを、天からあなた方に送ってくるのはこの為です。あなた方の心に宿った悲しみを、姑息な手

段で紛らそうとしてはいけません。さりとて之に淫し、悲しむ事を楽しんではいけません。悲しみの中から神に呼ばわり求めなさい。神様を信頼しなさい。そうすればあなた方の深い悲しみも、朝には必ず歓喜に化するであります。」

続いて伊藤祐之先生の短歌一首をご紹介します。先生は「自由・貞潔・来世」を重んずる真実のキリスト者でありましたが、またすぐれた歌人でもあり多くの歌を遺されました。そのなかの本日の一首とは「また逢はむ みゆるしのもとまた逢はむ 君よ待ちませきよき岸べに」という一首であります。この歌を読むごとに聞くごとに私は「やがて会いなん、愛でにしものと、やがてあいなん」と全節で繰返し、天に在るものも、地にあるものもともに「きよき岸べ、天つみくに」での再会を熱誠こめて希求する讚美歌489番を思い起し、この二つの歌によって私の来世信仰、復活信仰は増幅されます。

ご遺族の皆様、私は皆様が矢内原先生のご教示に従い、「悲しみの中から神に呼ばわり求め」、「神様を信頼し」つつ、星野徹兄にならい、同じ信仰の道を歩いて、伊藤先生のお勧めのように、天国の「きよき岸べ」での大いなる再会の喜びをぜひぜひもって頂きたいと強く希求してやみません。

最後に、重ねて星野兄83年のご生涯を深く、豊かに御導き下さいました神とキリストの聖名を讚美いたしますとともに、その御恩恵を心から感謝いたします。また御遺族の皆様キリストの御慰めと御祝福がいよいよ豊かにございまして、天国での再会の喜びに浴し得ますよう重ねてお祈りいたします。さらに御参列下さいました皆様方の上にも、聖霊が豊かに注がれまして主の御救いと御祝福に浴し得ますようお祈りいたします。加えてこの故星野徹兄の葬儀・告別式が「メント・モリ」一死を銘記し、各自の死に備えるための時と場にも用いられますよう祈り、以上をもって私の式辞を終ります。

209号

ただキリストと共に歩む

鬼沢 力男

水戸の地に蒔かれた無教会キリスト教信仰の種は「水戸無教会日曜集会」として1954年6月に水戸幼稚園を集会場所として根をおろした。

「水戸学に基礎を置く伝統的国粹主義、他方には零細な商業都市として根強い実利主義、それらに加えて敗戦後の退廃的風潮と水戸人の性格故に激烈なソシアリズム的傾向等頗る複雑な思想的背景を持つ水戸市、而してカトリックとプロテスタント諸教派の教会も決して少ない数ではない水戸市。ここに神は福音のみを武器とする新しいそして最後の攻略を開始されたのである。これに用いられるものは無名の一公務員、一商人、一農民に過ぎない。その力は極めて弱く、その声は甚だ低い。然し思い見よ！ ガリラヤ湖畔に於けるイエスの伝道の最初の弟子数人は実に一漁師の息子たちに過ぎなかったことを！ 社会的身分、学問の多寡が福音を決定しない。進めるも退くも神御自身のみ意による。水戸無教会は神のみにより頼み、神と共に歩む。ただキリストと共に進むところ「勝利は既に我が内にあり、である」

と、その燃える決意を『水戸無教会』誌創刊号の後書きに、編集人の半田梅雄兄（故人）が記している。主の御支えによって55年の歳月を経て今日に至った。

また、『水戸無教会』誌も、その翌年1955年3月に創刊されてから今日までに209号を数えた。

集会発足の中心であった松本文助兄（故人—水戸幼稚園初代園主）は、

「コリント前書の記者の書かれた「信仰と希望と愛とこの三つの中、最も大なるは愛であるとは実にアーメンである。水戸無教会誌の発刊もまた愛の発露でなければならぬ。進まんかな、教友よ、同志よ、愛のシンボル、十字架を負うて。」

と、「創刊にあたって」の巻頭に記している。

現在発足からの歳月が流れて高齢化が進み、また教友も少なくなってきたが、毎週聖日集会がもたれ、そのうち月一回は市中における「公開講演」の開催も護られてきた。

—ただキリストと共に歩む—これは本誌の副題でもある。その歩みが今日まで継続されていることをあらためて思い、主の御導きと御支えを感謝するものである。

## 210号

### 内村鑑三生誕150年に想う

星野 光利

1861年に内村鑑三が生まれて今年150年目にあたる。あらためて水戸無教会の信仰の基盤を与えてくれた内村生誕の意義について、次のように考えてみた。

1. 私たちに、聖書に示される真の神とイエス・キリストを教えてくれた。
2. 十字架の贖罪の信仰のみによって救われることを示してくれた。
3. マルチン・ルターの宗教改革の不徹底さを内村は認識し、プロテスタント教会が今日もなお残している洗礼、聖餐という二つの sacrament を除いた第二の宗教

改革とも言うべき無教会の信仰理解を示してくれた。

4. われわれの集会は、より大きな全体的なエクレシアの枝に過ぎないことを教えてくれた。
5. イエスを救い主と信じ、イエスを愛することは、日本という国を愛することであると教えてくれた。その信仰と愛とは世界に広がり、神の愛のごとく無限の広がりとし深さを持っている――内村の墓碑銘の如くに。
6. 私たちが無教会の信仰に立って集い、聖書を学ぶ意義と喜びを示してくれた。
7. 神が創造された天然と歴史とを味わい学ぶべきことを我々に教えてくれた。

今から50年前、内村生誕100年を記念して、矢内原忠雄は1961年に「日本の思想史上における内村鑑三の地位」と題して講演をした。その講演を終るにあたり次のように述べている。「世間が無教会を認めるということが、無教会を一つの勢力として認めるのであるならば、これは無教会の危機です。無教会は勢力ではありません。運動でもありません。無教会は一つの精神です。清潔な、清水のような精神であります。一つの信仰です。まじりなき純粋な信仰です。この精神と信仰とに生きていくときに、われわれはこの世から抵抗を受け、われわれは彼らに抵抗し、必ずや彼らから辱めと嘲りと反対を受けるでしょう。無教会を一つの勢力として認めること、認められるそのことが、無教会の危機を招きます。いまやわれわれは内村鑑三の霊に対して申し上げる。われわれは無教会の精神を、その精神と信仰を、純粋に守っていきます、受け継いでいきます」と。

私たちは水戸無教会誌の表紙に、“ただキリストと共に歩む”と記している。この言葉は、無教会の精神をよく語っている。すなわち、われわれはキリスト以外とは歩まないということである。矢内原の述べたごとく、純粋な信仰を水戸無教会の存在の根底に置くということを内外に宣言している。このことは、水戸無教会というエクレシアの設立に携わった先人たちと共に、その精神を受けついで永く集会を続けてきた会員すべての主にある旗印である。

## 211号

### からし種一粒ほどの信仰

鬼沢 力男

イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」（マルコ4：30-32）

からし種の木の苗木を昨年の夏に集会の教友からいただいた。イエスによるからし種の譬えがあり、その成長を見守った。今年の春先より日に日に枝を伸ばし始め、7月には2メートルを超えて、黄色い可憐な花をたくさん咲かせた。

さらに伸び続け11月の今は4メートル近くに達し、まわりの庭木を越して、秋の

空に次々と花を咲かせている。花は種を付け、からし粒の種を見ることが出来た。今度は自分で種を蒔き発芽を観察した。種も発芽もその小ささはルーペで目を凝らしてやっと見えた。種から目の前にあるからし種の木の大きさは想像つかない。

「この一番小さい種子が、育ちて他のすべての野菜より大きく、ついに木のようになりて、空の鳥が巣食うほどになること、そのことが天の国の成長に似ている、というのである。神の畑である人の心に福音の種が蒔かれ、芽を出し、穂を出し、ついに成熟する、育てたもうは神である。全ては神の力、神の愛の業である。」（塚本虎二）

「からし種一粒ほどの信仰」。あるか無いか判らぬほど信仰。私たち一人ひとりの中にも神はきっと種をまかれ、芽を出させて下さっているであろう。神の力が働き、からし種の木のように大きくなる。良き実を結ぶよう成長を心待ちにしているに違いない。

「もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。あなたがたにできないことは何もない。」（マタイ17：20）

今年は東日本大震災が襲い地震と津波と原発事故に多くの人々が苦しんでいる。家を失い、家族を失い、仕事を失い、放射能汚染に故郷に戻れない、被災地の人々が、厳しい冬を迎えようとしている。

イエスは、苦しんでいる人に手を差し伸べたのは、異邦のサマリヤ人であって、彼が良き隣人だと言われた。隣人を自分自身のように愛するようにと。

からし種の木は、私の前に立ち静かにイエスの言葉を語りかけている。

## 212号巻頭言 悲しむこと

萩野谷 興

「悲しもうー東日本大震災・原発1年」

これは『世界』の2012年4月号のテーマである。

「悲しもう・・・」の赤い大文字はその体裁からして挑戦的である。

その意味するところは何か。編集長は言う。“史上最悪の原発事故や激甚な津波の被害地の人々は七転八倒の苦しみの中で喘いでいる。一方、被災地以外では奇妙な「日常」回帰が進行している。”“本号の特集「悲しむ」ことの提起はこの偽りの「日常」への抵抗の呼びかけである”と。

昨夏以来、私は、東京、福島、茨城におけるいくつかの会合に参加し、被災者たちの悲痛な叫びに耳を傾けた。福島の海岸沿いでは津波で流された家々の跡地に立ったりもした。しかし、この程度の行動をしたからといって、実際に被害に遭った人々の

苦しみ、悲しみを同一レベルで感じられるものではない。その意味で私も、「被災地以外」にいる1人であることを認めざるをえない。

では、「悲しもう」との呼びかけにどう対応すべきであろうか。

私なりに現在思っていることをつぎのとおりまとめてみた。

- 1、今なお悲しんでいる人々の現実継続的に関心を持ちつづけること。これはともすれば「日常」に逃げ込み易い自分との戦いでもある。
- 2、原子力発電の存続の是非を冷静に客観的に検討し、自分なりの意見を持つように努めること。その際、国論を二分するほどの大問題であることを忘れず、対立意見にも謙虚に耳を傾ける必要がある。
- 3、「悲しみ」を信仰の面から深く受けとめていくこと。このことに関しての矢内原忠雄先生の一文は貴重である。

「悲しみの人の忍苦の生涯をじっと見つめれば、此の不可解なる苦痛の生涯の原因たるものは意外にも、彼に同情を表さうと欲したところの私共自身の罪である事を感じしめられます。」（全集14巻328頁「かなしみ」）

この教示をふまえつつ、「ほんとうに幸福な人、それはいま悲しみにとぎされている人たちである。彼らは慰めと力とを与えられるであろう。」（マタイ5：4柳生直行訳）を読むとき、この聖句が少しばかり身近なものになってくるのを覚える。

## 213号巻頭言

### ヨハネ福音書に学ぶ

星野光利

四福音書の中で、ヨハネ福音書は私たちに、ヨハネしか伝えていない独特な福音の貴重な学びを与えてくれる。そのような学びを通して、私たちは、イエスの福音をより広く、深く学ぶことが許される。自己の小さい殻に閉じこもりとする信仰、枯れかかった生気のない信仰に命を与え、再び私たちの命を生き生きと宇宙大に広げてくれる。

一例として、先ず、ヨハネ福音書1章1節を見よう。「(世の)始めに、(すでに)言葉はロゴスおられた。言葉は神とともにおられた。言葉は神であった。」（塚本虎二訳）とある。私たちは、「始めに」ということが、世界、宇宙、世の始めであることを学び、このことから、「世の始め」ということが、創世記冒頭に描かれている神による天地の創造と深く関係していることを知ることが出来る。その天地すなわち宇宙の創造の時に、すでに言葉はロゴスおられたと言っている。どのようにしておられたかは、私たちに詳しくは分らない。しかし、天地を創造された神とともにおられ、宇宙と人を見守り続けてくれている存在としておられたのであろう。続けて1章1節に、この「言葉は神であった」と驚くべきことを述べている。私たちが考える神というのは、全知全能で、人間の触れることも、見ることも、定義することも出来ない方であると



思ってしまう。ここでは、そのような無限大の神を“<sup>ロゴス</sup>言葉”と定義している。しかし、人間の思考の中におさまってしまう神であるとはとうてい考えられない。

そのような無限大の方である“ロゴス”が1章14節で、この地球上に下ってきて下さって、人間の姿になられたと述べられている。

神の創った宇宙の一隅に、その大きさから比べたら小さな点であり埃とも思えるような地球という天体の上に、人間の救いのために、ヤアウェなる神が人間の姿になって現れて下さったとヨハネ福音書は主張する。この地球上に一瞬間の生を受けて私たちは、生まれ、人生を送りそして死んでいく。そのような小さな無価値なとも思える私たちに、神は意味を与えるため、肉となって人間の姿で現れ、神と人、さらには、人と人との和解の関係を結ばせて下さった。ヨハネ福音書を学んでいると、このイエスの降世（受肉により人間になられたこと）の事実が、全てのことの根底にあることを思い起こさせられる。ヨハネ福音書のどんな記事においても、通奏低音の如く背景として鳴り響いている。

そして同1章33節でヨハネはイエスが聖霊によってバプテスマを受ける方であることを証言している。このヨハネの証言によって、全ての宗教的な儀式が廃棄され、私たちに求められるのはただイエスとの霊的なつながりと回心であることが分る。そのことを、内村鑑三は無教会キリスト教の信仰として、私たちに教えてくれているように思われる。

## 214号巻頭言

### 「我は福音を恥とせず」

鬼沢 力男

「我は福音を恥とせず」はパウロが「ローマ人への手紙」のはじめ、1章16節に記した言葉である。

内村鑑三は『聖書之研究』創刊号の冒頭にこの言葉を記した。

「我は福音を恥とせず、此福音はユダヤ人を始め、ギリシャ人、總て信ずる者を救はんとの神の大能なればなり。保羅」  
パウロ、内村が自分の生涯の全てをもって表明する第一の言葉として最重要視したものであったと思う。

その福音とは何であるか、ローマ書3章23～26節は示す。

「すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、彼らは、働なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである。神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、それは、今の時に、神の義を示すためであった。こうして、神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされるのである。」

「まことに人の救われるは行いによらず、信仰による。功なくして、ただキリストを

を信ずる信仰のみによりて、神の恩恵を受けて義とせられる。これイエスの十字架の贖罪があるためである。人はただイエスを信ずるによりて罪をゆるされ、潔めらる、唯一の救いの道は信仰である。福音はただ一つすなわち信仰によって神に義とせられ平安に入るのである。仰ぎ見よ、さらば救われん。…福音は神の力である、悔い改め、信仰、慰藉、愛、平安、歡喜、勇氣、希望、これを與うる力が福音にある。」

(内村『ロマ書の研究』)

人はいかにして救われるか—イエス・キリストの十字架の贖い、イエス・キリストの贖罪による赦罪の信仰あるのみである、ただ信仰による仰瞻ぎょうせんによって与えられる。その他は一切いらないと。パウロも内村もただひたすらイエスを仰いだ。パウロのローマの人々に伝えたかった最大の善きものがこの主イエスの福音であった。

内村は「ただイエス・キリストの福音」を愛する日本へ伝えてくれた。迷える羊だった私もいつの間にか主なる牧者が捜してくださり牧の中に導かれた。主の愛、恩恵が限りなくふりそそがれている事を覚えた。内村のいう「実験」という事実を通して私もそのことを知った。

『聖書之研究』終刊号に、「聖書研究の目的はイエス・キリストを知らんが為である。研究の為の研究ではない、イエスを知らんが為である。彼を知るは生命である。」と、内村は神の子イエスを指し示し続けた。私も讚美す、主は我が牧者、ただ主を仰ぐ。

## 215号巻頭言

### 赦しと和解

萩野谷 興

「闘って敵を宥ゆるして逝った人」。最近の朝日新聞の川柳欄の一句で、南アフリカのネルソン・マンデラ元大統領を詠んだものである。

マンデラ氏は2013年12月5日、95才で波乱に満ちた生涯を閉じた。同氏の死去のニュースはその功績と共に世界を駆け巡った。

彼は1950年代からアパルトヘイト（人種隔離政策）の撤廃活動に身を投じたが、62年に逮捕、その2年後の64年に国家反逆罪で終身刑の判決を受け、27年間収監された。90年2月によりやく釈放（当時71才半）、91年6月南ア政府がアパルトヘイト終結宣言。93年、ノーベル平和賞を受賞。94年、南ア初の黒人大統領に選任。

マンデラ氏の生き方や活動ぶりについてはマスメディアによる報道によるものだけでも、感銘を受けたものがたくさんがあるが、その中の一つを取り上げてみたい。

南アのズマ大統領は、マンデラ氏について「愛と和解の象徴だった。国を再建するために怒りを克服できることを我々に教えてくれた。」と語り、ツツ元大主教は、「分断した国に一体となることを教えてくれた。」と話している。

マンデラ氏は若い頃は戦闘心の固まりであった。「武力行動を通じてしか自由は勝ち取れない。闘いはわが人生である。」という言葉がそれを示している。しかし、94

年の大統領就任時には、「傷を癒す時が来た。我々を隔てる溝を埋める時が来た。国を造る時代がやってきたのだ」と語っている。

彼は27年間にわたって収監され、その間に結核をはじめ呼吸器疾患になり、石灰石採掘場での重労働によって目を痛めた。このような過酷な仕打ちを長年にわたって受けた彼の権力側に対する怒りや憎悪には筆舌に尽くしがたいものがあつたはずである。しかし、彼は90年に釈放された時、「にがにがしさと憎しみは刑務所に置いてきた。」と語つたという。

では、マンデラ氏の心をこのように変えた根底には何があるのだろうか。

私は、先に引用した彼の言葉の中の「我々を隔てる溝を埋める時が来た。」にそのヒントがあるように思う。

パウロは、「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊された」と言う（エフェソ2：14）。

ここで「二つのもの」とは、その前後関係から見て、異邦人とイスラエルの民を指すであろう。この両者は本来相容れないものであつた。

パウロは、先の言葉に続けて、「キリストは双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。」と述べる。マンデラ氏が怒りと憎しみを克服し、復讐を恐れていた白人たちに赦しの心を持ち、人種間の和解を導いた背景にはパウロの上述の信仰と同じものがあつたように思われる。

## 216号巻頭言

### 福音書著者ヨハネの信仰に学ぶ

星野 光利

集会でヨハネ福音書を学ぶ機会が与えられ感謝している。この学びを通して、それまで分からなかつた著者ヨハネの信仰や多くの新たに教えられたこと等があり、信仰の奥深さとその喜びを深く味わうことが出来た。ヨハネ福音書は冒頭部で、「言（ロゴス）は肉となつて、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。」

（1:14）と書いている。キリストはロゴスとして宇宙創造の前から父なる神の許にあつたが、その神の子たるロゴスが受肉し、イエスとして人間の姿になられたことは、罪に沈める人に救いを与えるためであつたことを改めて知り学ぶことが出来た。

イエスは父なる神との一体性を持ち続け、十字架の死に至るまで神の国を宣教し地上を歩まれた。イエスが神と一体であつたように人もイエスを見上げて、信仰を通しイエスとの一体性の内に歩んで行くことが出来る。そのようにして、誤り易く弱い私たちも、神の与えて下さる希望と愛と平安の内に歩むことが許され、神の聖と義に生きることが出来ることをヨハネ福音書は教えてくれる。信仰の道がたやすいものでないことや人は自分の恐怖に対して弱い存在であることは、イエスが捕われた直後、大祭司の館までついて行き火にあたっていたペテロが、いとも簡単に「そんな人は知ら

ない」と三度もイエスを否認した（18:17、25、27）ことに示されている。

「わたしは道であり、真理であり、命である」（14:6）と言って、イエスは自らを父なる神と一体であることを強調する。そして「その人（イエス）が、聖霊によって洗礼（バプテスマ）を授ける人である。」（1:33）、「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることは出来ない。」（3:3）、「この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。」（4:21）、「神は霊である。だから、礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」（4:24）と礼拝の真のあり方を私たちに示している。

宗教儀式はあらゆる宗教組織で、一体性保持と勢力拡張のために重要なものとされている。イエスが活動した2000年前のユダヤ社会でも同様であった。しかし、ヨハネ福音書ではイエスは宗教儀式を重んじていないだけでなく、かえって否定していると取れる箇所がある。ヨハネ4章2節である。そこには「洗礼（バプテスマ）を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子達である。」と書かれている。神を礼拝することは神と人の間に他人の介入を許さない霊と真理の問題であり、それを単なる一宗教儀式とすることにイエスは徹底して反対して来たことが読み取れる。そのようなイエスの姿に私たちはキリスト教の信仰を学ぶ。内村鑑三に始まる無教会の諸先輩は、その信仰の生涯をもってヨハネ福音書と同様な主張を著書や行動で示してこられたと思う。霊と真理の礼拝を第一としているイエスは、洗礼に対する態度を明らかにしており、我々はヨハネ福音書から無教会信仰を学ぶことが出来る。

## 217号巻頭言

### 人生の晩年の生活

藤山 修

最近、あるテレビ番組で、長寿者の方の「多幸福感」について取り上げていました。多くの長寿者の方が抱く気持ちだそうです。周りの人々に支えられて、ここまで生きることができたという思いが、不幸な感情よりも幸福感を抱き、死を悲観的に受けとめていないというものでした。

さて、ヒルティの『幸福論（第二部）』（草間平作・大和太郎訳 岩波文庫）に、「人生の段階」という項目があり、年老いた人達の生活について書かれています。

年老いた人達の生活には、普通三つの考え方が現れてくる。外的に恵まれた境遇にある老人の普通の考え方は、生活享樂者のそれである。品のよしあしの差こそあれ、余生を出来るかぎり享樂しようとするもので、…… そうした性向の根底は利己主義であって、…… 身分がたかくてなすこともなく暮らす連中は、たいていこのような晩年を迎えるものだ。

次に、それよりも余程ましな人生の結末は、生涯のおもな時期を多忙のうちに過ごした人達の味わう閑日月である。…… 別荘や隠居所で一家眷族の尊敬をうけ、大

事にかしづかれながら、晩年を上品な無為のうちに過ごし、青年時代や大学時代、旅行や従軍などの思い出にふけり、時には回想録を書いたり、または記念祝賀会を催してもらったりする悠悠自適の老人などである。

第三の種類晩年は、より高いのちへの前進である。つねに鋤から手を離さず、決してうしろをふり返らず（ルカによる福音書9：62）、絶えず眼をこれから到達すべきものに注いでいる生活である。本来こうした人生観は、来世を信ずる人達のみが持つことのできるものである。…… いずれにしても、この種の人生の終末が、最も値打ちのある、いや、本当はこれだけが値打ちのあるものである。

そして、ヒルティは、キリスト教信仰をもった者の晩年の生活は、天国に入れられるために、人生の最終段階が始まる時に、通例、最後の大きな試練があらわれるだろう、と言います。生に執着せず、決して後ろを振り向かず、神に近づくことを目指し、謙遜な少しも己惚れのない者となり、死に臨んで、神の意志にしたがう完全な心構えができるための試練である、と言っています。私達の人生の晩年の生活は、ヒルティの言う第三のそれであるのでしょうか。

わたしは、すでにそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕えようと努めているのです。（フィリピの信徒への手紙3：12）

## 218号巻頭言 和解

鬼沢 力男

「あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰ってきて、供え物を献げなさい。あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。」（マタイ5：23～25）

イエスは「神の前に立つ前に兄弟と和解しなさい、人間同士が和解するように」と言われます。

ドイツ敗戦から40年になる1985年5月8日の記念日に行ったヴァイツゼッカー大統領は、国民に人間同士、民族同士の和解を訴えました。

「問題は過去を克服することではありません。後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません。しかし過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。罪の有無、老幼いづれを問わず、我々全員が過去を引き受けねばなりません。」（永井清彦訳 岩波ブックレットNO.55）

さらに彼は、旧約聖書の中から、モーセの出エジプトの「荒れ野の40年」という歳月が人々にとって、かつて身に受けた神の助け、救い、苦しみを全て忘れ去ってしま

う、人間の意識に重大な影響を及ぼすことを国民に語り、近隣の国々に対して過去に犯したドイツの罪の赦しを乞おうと訴えたのです。

大きな戦場となったヨーロッパは、今やユーロ圏として互いに手を取り合っています。主の御言葉によって、神の前に立つ兄弟として和解が出来たのでした。

日本は戦争の過ちを繰り返さないために、世界に唯一の戦争放棄の平和憲法を制定し、今日まで遵守して「戦争をしない国日本」として今日に至りました。

しかし、21世紀に入っても人類は歴史の過去に向き合うことなく、戦うことのみを学び続けています。日本は敗戦後70年を迎え、戦後生まれの戦争を知らない世代が大半になるに及んで、政府は集団自衛権を行使し戦争の出来る国へギアチェンジをして、平和を守ろうとする動きを止めて、国民にも容認する兆しが見えます。

私の長兄は南方ニューギニアの戦場にて23歳で戦死しました。多くの戦場に散った人々、現地で巻き添えになった人々は、戦争のない平和な世界に生きたいとどんなに願ったことでしょうか。敗戦後日本が「戦争の放棄、武器を持たない」と宣言し「平和憲法」をつくり戦争をしない国になったことを、我が希望の達成と見届け喜んで天に帰ったのではと思います。生き残っている日本国民に日本が侵した国々への赦罪と和解を、さらに全世界との和解の務めを果たすことを託されたと思います。

そして今日、戦後が終わらない沖縄基地問題、唯一の被曝国としての使命、福島原発事故未解決の中での原発再稼働と、人類平和を脅かす力の前に和解が遠のかないよう、過去に目を閉ざす者にならないように、国民は語りかけられていると思います。

## 219号巻頭言

### 足蹴にされた平和憲法

萩野谷 興

2015年9月17日は、日本の歴史上の一大汚点として永久に記憶されるべき日となった。安全保障関連法案（以下「安保法案」）が参議院で強行採決された日である。

昨2014年7月、第2次安倍内閣は、憲法9条に関して、歴代内閣が踏襲してきた解釈を変更し、集団的自衛権も「認められる」とするいわゆる解釈改憲の閣議決定をした。

それに対し、多くの国民が厳しい反論と抗議活動を展開してきた。憲法学者のほとんどが一致して反対し、また、元内閣法制局長官や元最高裁長官までが集団自衛権は憲法違反と断定した。

平和憲法が施行されたのは1947年5月3日であり、以来約70年が経った本年、ついに政府や与党議員らによって用なしとして足蹴も同然にされたのである。

安保法案決議の一連の経過を見て私が思ったことは、与党国会議員が一定以上の多数派を占めるや、政権担当者は傲慢になり急に牙を国民に向けるということである。

そのことはもちろん昔から言われてきたことではあるが、今回の一連の政治の動きは、まさにその実例となった。

法案が可決されたあと、政府は強引な採決のことは忘れたかの如く装い、国民の前にニンジンぶらさげて見せた。「一億総活躍時代」というアドバルーンがそれである。

時事通信の11月世論調査によると安倍内閣の支持率は前月比0.4%増の40.5%で、4か月ぶりに4割台に回復、不支持率は同1.6%減の36.1%とのことである（東京新聞11月15日）。ほんの2か月前に憲法9条違反行為をやったのけた安倍内閣に対し、早くも支持者の方が上回ってしまうとは！

歴史の大切な教訓を忘れてたり、利益誘導や派手な宣伝に乗せられやすい傾向が依然として私たち国民に根強く残っていることを認めざるを得ない。

総じて言えることは、我が国に民主主義が導入されてほぼ70年をすぎたのに、これを担う主体である国民の批判精神がまだ十分に育っていないということである。

太平洋戦争の惨禍を経たあと天与によって生まれた平和憲法は戦後の荒波にもまれながらも国民に定着し、国民の理想となり、誇りの根元でもあり続けた。それをいつときの横暴な政権がこれを足蹴にし、葬り去ることは許されるものではない。

平和憲法の維持を願う者とそれを改変して戦争のできる普通の国にしたいと願う者との拮抗の度合いはこれからますます強まっていくであろう。

しかし、私たちはなおあきらめることはしない。イエス・キリストの父なる神が歴史を良き方向に導き給うことを信じるからである。では、これから私たちは何をなすべきか。私は、志を同じくする人々と共によく考え、できるだけの行動をしていきたいと思う。